

石の傍路

山本有三

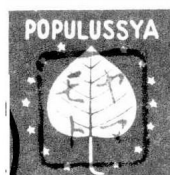
IDOL BOOKS

IDOL BOOKS

石の傍路

山本有三





アイドル・ブックス・2

路 傍 の 石

390円

著者・山本有三
やまもとゆうぞう

発行・昭和45年4月30日 ©

発行者・久保田忠夫

発行所・株式会社ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 振替東京149271番

印刷所・新興印刷製本株式会社

製本所・三進製本所

本文紙・日本製紙特漉上質

クロス・太平製紙株式会社

目次

くち絵のかわりに	四
中学志望	二
その夜のことば	三
実学	四〇
意地	五
赤い糸	七
吾一	九
先祖と家から	一〇
うつりかわり	二七
前かけ	一五

やぶ入り

一三

物価騰貴（ブツカトウキ）

一八〇

東京

一九六

ダルマさん、ダルマさん

二四

かんなん、なんじを玉にす

二三

言いわけでは、ランプはつかない

二五

次野先生

二六

解説
年譜

共立女子大学助教授 越智治雄

二八
三〇〇

装幀 菊地 薫
さし絵 太田 大八

路
傍
の
石

山
本
有
三

くち絵のかわりに

そのとき、吾一（ゴイチ）は学校から帰ったばかりだった。はかまをぬいでいるところへ、おとつあんが、ひよっこり帰ってきた。おとつあんは、彼に銅貨（ドウカ）を一つ渡して、焼きイモを買ってこい、と言った。よつぽど腹がすいているらしく、いやにせか／＼していた。

吾一は、急いで路地を駆（カ）け出して行つた。

ちょうど、おやつ時刻だったので、焼きイモ屋の店さきは、ふろしきを持った小僧（コゾウ）だの、オカモチをさげた女中だのが、黒びかりのする、大きなカマの前に、いっぱい立っていた。なか／＼順がまわつてこないで、吾一はいら／＼したが、やつと、彼の番になった。

「おつぎは、おいくら。」

イモ屋のおやじは長い竹のハシを動かしながら、いそがしそうに言った。

大きな店の小僧たちが、十銭も二十銭も買つて行くなかで、少しばかり買うのは、吾一はなんとなく、きまりが悪かった。彼はちいさな声で、「一銭。」と言った。

「おいきた。」

主人は威勢よく答えて、カマの中から、なれた手つきで、ひよい／＼とイモをはさみあげた。

きょうはバカにまけてくれるんだなあ、と吾一は思った。やがて、新聞にくるんでくれた焼きイモを受け取って厚いカマのふちの上に、一銭銅貨をおくと、「あつ、ちよつと待った！」

と、おやじはとんきょうな声を出して、吾一から急に包みを取りもどした。そして、三つ、六つと勘

定（カンジョウ）しながら、包みの中のものを、カマへ返しはじめた。おやじは一錢を十錢と聞きちがえたものらしい。向こうがまちがえたのではあるけれども、いったん、包んでくれたものの中から、数へらされることは、こっちが悪いことでもしているように見えて、ひどくきまりが悪かった。吾一はカマの前に立っていることが苦しくなつて、逃げ出したくなった。

そのとき、

「はいよ。」

と言つて、おやじが、ちいさな袋（フクロ）を渡した。吾一はそれを持つと、どろぼうのように、こそくと店さきから竊をけた。

うちに帰ると、どうしたのか、おとつぁんはいなかった。彼は「おとつぁーん。」と大きな声を出して呼んでみたが、返事がなかった。さつき、い

やにせか／＼していたから、急に用を思い出して、また出かけて行つたのかもしれない。しかし、こんな思いをして買ってきたのに、と思うと、彼はくやしかった。

吾一は外へ遊びに行きたかったが、あいにく、おつかさんもないので、買ってきたものを、置きっぱなしにして行くわけにはいかなかった。こんなにしてしまうと、焼きイモがつめたくなってしまう。彼はさめなようにと思つて、袋のまゝふところに入れて、あつためていた。しかし、おとつぁんも、おつかさんも、なか／＼帰つてこなかった。

と、えりとえりの合わせ目から、なんとも言えない、香ばしいにおいが、ほど合いのあつたかさを持つて、ぼうつとのぼってくる。吾一は大いに誘惑（ユウワク）を感じたが、思いきつて、両方のえりをびしんとかき合わせて、顔を横のほうに向けていた。そ

れでも、あごの下のほうから、香ばしいにおいがあがってきたが、彼は目をつぶって、我慢（ガマン）をしていた。すると、今度は焼きイモのぬくもりで、おなかがだん／＼あったかくなってきた。あったかになってくると、腹がとき／＼ガマのように、グーと、うなりだした。

そのころ、吾一はおやつをたべていなかったから、わけでも腹がすいていた。お小づかいをもらわないわけではないけれども、小づかいは、毎日、貯金バコにほうりこむことにしていた。買い食いをしないで、小づかいはなるたけ貯金するようにと、学校の先生から言われて以来、それを実行しているのである。しかし、三時ごろになると、毎日、おなかがすいてたまらなかった。けれども、そこを我慢して、小づかいをつかわないようにしなくてはいけないのだと思つて、こらえてきたが、きょうは、ふところの中

にすばらしいものを持っているのである。しかも、これをたべたところで、貯金は少しもへるわけではない。あごの下からは、あい変わらず香ばしいにおいが鼻を突いてきた。焼きイモのにおいというのは、特別、鼻を刺激（シゲキ）する。

「おだちに、一つぐらい、いいだろう。」

とう／＼、こらえられなくなつて、吾一は袋の中に手を突っこんだ。

きょうのは丸やきなので、わけでもうまかった。彼は夢中（ムチュウ）で一つたいらげてしまった。一つたべると、前よりもかえつて食欲が増してくる。と、ひとりでに手がふところの中にはいつて、また一つ取り出した。さっきの焼きイモ屋での不愉快なことなんか、もうすっかり忘れてしまつていた。

そして、一つ、二つとたべているうちに、一銭ぐらゐの焼きイモは、いつのまにかなくなつて、ふと

ころの中は、新聞がみの袋だけになってしまった。

ぺしゃんこになっている袋が、指のさきにさわつたとき、吾一は言いようない寂(サビ)しきにおそわれた。彼は泣きだしたいような気もちになった。そして、ふところの新聞がみの袋を引っぱり出して、はしのほうを、わけもなく、ちぎっていた。

やがて、おとつっあんがどこからか、あたふたと帰ってきた。おとつっあんはあがるが早いのか、焼きイモはどうした、と言った。

吾一は答えられないので、下を向いたまゝ、焼きイモの袋を、じいっと見つめていた。

「なんだ。食ってしまったのか。しようないやつだな。」

おとつっあんはキセルで、火バチのふちを強くたたいた。

吾一は思わず、すゝりあげた。

「バカ、泣くやつがあるか。」

おとつっあんはそう言つて、しかつたが、きつとまた、銅貨を投げるのだろう、と思つた。そうしたら、さっきのような、いやなことはあつたけれど、吾一は喜んで、もう一度、イモ屋に駆(カ)けて行くつもりだった。

しかし、おとつっあんはサイフを出さなかつた。疲れたような顔をして、たゞキセルをくわえているだけだった。

吾一にはそれがまた、たまらなく悲しかった。不意に、おとつっあんの声がした。

「おい、なんだつて、そんなところに焼きイモの袋なんかおいとくんだ。早くかたづけちまえ。」

それから、いくんちもたゝない時のことである。

おやつをたべないものだから、吾一は腹がへつて

たまらなかつた。貯金なんて腹がへってやりきれないから、やめてしまおうかと思つたが、先生に言われたことが守れないのは、くやしいと思つた。ところが、ほかの友だちに聞いてみると、友だちもみんなやめてしまったと言う。「それじゃ、おれも……」と、ひよいと、よわ気になりかけたが、彼はこういうとき、かえつて、えこじになる子どもだつた。

「よし、それなら、おれがやり通してみせる。」

が、どうがんばつてみても、腹のへることは同じだつた。あるとき、彼はうちの前で、ふと、コマを落とした。取ろうと思つて縁(エシ)の下をのぞくと、サツマイモがワラの中にころがっている。どうして、こんなところに、オサツをころがしておくんだらう、と不思議に思つたが、そんなことよりも何よりも、吾一のあたまにびんときたことは、「しめた。」という、きらめきだつた。

彼はさつそく縁の下にもぐりこんで、そいつを一つ取りあげた。なんだか、普通のサツマイモにくらべると、少し皮の色がちがつているような氣もしたが、たいして氣にもとめなかつた。皮には、ほとんど、はついていになかつたけれど、彼はつゝつぽのそでのさきで、なんどもこすつてから、大きくガクリとやつた。

ガクリとやつてから、彼は急に妙な顔をして、ほき出してしまつた。あまみがなくて、へんに水けがあるくせに、かす／＼していた。きつと、できそこないのサツマイモだろうと、彼は思つた。

吾一はそいつをほうり出して、べつのをかじつてみた。それも、やはりかす／＼だつた。このなかには一つぐらい、うまいのがあるだろう、と思つて、四つ五つ、食いかいてみたが、どれもうまいのにあたらなかつた。

「まあ、そんなところで何をしているの。」

急におっかさんの声が、上から響(とど)いてきた。

「あら、吾一ちゃん。まあ、ダリヤをみんな台なしにしてしまつて……」

ダリヤという声を聞くと、おとつぁんも縁がわへ飛んできた。

その時分は、ダリヤが非常に珍(メズラ)しいところで、ダリヤという名まえさえ、吾一はまだ知らなかった。その球根(キューコン)は父おやが東京からもらつてきたもので、たいへん大事にしていたのである。

おとつぁんは、はだしで飛びおりて、いきなり吾一をなぐりつけた。

「きさまは、どうして、こう食いしんぼうなんだ。ネズミのように、なんでも、かじつちまやがる。」

その場は、おっかさんの取りなしで、やつとおさまつたが、おとつぁんは、なおぷりくしていた。吾一がこんなことをするのは、つまりは、おやつをたべないからである。おやつをたべないで貯金をする、などということは、子どもには無理な注文である。そんなことは、やめさせてしまえ、と言つた。

しかし、吾一はやはり貯金をやめなかった。食いしんぼうと言われたことが、ひどくこたえたのである。食いしんぼうにはちがいないのだが、そうあからさまに言われると、「食いしんぼうなもんかい。」と、はね返さずにはいられなかった。それに、彼は学校で級長をしていた。おれは級長なんだから、先生の言つたことは、どんなことをしても守らなくっちゃいけないんだという考えも、かなり彼を支配していた。

彼は、毎日、歯(ハ)をくいしばつて、おやつの時

間を辛抱（シンボウ）した。友だちと夢中になって遊んでいるようなときには、忘れてしまうこともあるが、雨がふって、うちにいるようなおりには、かなり、つらかった。そんな場あいには、彼は本を読んだり、体操をしたりして、まぎらした。ある時なんか、たまらなくなつて貯金バコに手をかけたこともあつたが、おっかさからあけ方をおそわつていないものだから、どうしても、あかなかつた。あけられないのは、くやしがつたが、あとでは、それをしあわせだと思つた。

そのうちに、彼はいなば屋の店さきで本を読むことを覚えた。いなば屋は路地の出ぐちの大きな本やで、吾一のうちのおゝやさんだつた。はじめは、本をたゞ読みすることは、悪いような気がして、はしのほうで、こっそり立ち読みをしていたが、いなば屋のおじさんは、たいへんいいおじさんで、「君に

はこれがいいだろう。」とか、「こんど、こういうのがきたよ。」なんて言つて、「世界おとぎばな」や

「少年世界」なんかを、どん／＼貸してくれた。

吾一は前から本が好きだつたが、こういういい図書館ができたので、彼はますます／＼本が好きになつた。彼はどんな日でも、いなば屋の店さきに姿を見せないことはなかつた。ダリヤをかじつた少年は、こんどは毎日、本をかじつていた。

それから、いなば屋へ行くと、とき／＼塩せんべいや、おいしいお菓子をもらつた。もちろん、それが目あてではないけれども、吾一にとつては、それも、いなば屋へ行く一つの楽しみだつた。

一方、貯金はだん／＼ふえて行つた。一日一銭か二銭の貯金だから、たいした額にはならないが、お正月とか、お祭りのときのお小づかいや、あるいは、人からもらつたおひねりなどを、吾一はみんな貯金

バコに入れてしまったから、思いのほかのものになった。貯金バコがいっぱいになると、おっかさんはそれを郵便貯金にかけてくれた。吾一はもう三円になったとか、五円になったとか言つて喜んでいたが、この貯金が十円ほどになったときに、父おやはそれを引き出して、自分の訴訟事件（ソシヨウジケン）のほうにつきこんでしまった。子どもなんか貯金をしなくてもいい、と言つていた父おやだが、事件が切迫（セツバク）してくると、うちにある金は、だれのものでも見さかいなく、持ち出してしまった。が、吾一は貯金帳がからになつてゐることは、夢にも知らなかった。

中学志望

「おっかさん、行つてまいります。」

自分の息（イキ）がまっ白く、かたまつて流れた。

吾一は思わず肩をすぼめた。

でも、松を抜いたあとにさしこんであるかど松のいんが目にはいると、やっぱり、春らしい気がしないでもなかった。が、その青いものも、あたまをちぢこめて、さむそうに土の中にかこんでいた。

吾一はかど口で二、三べん、両手をこすり合わせると、急いでいなば屋の路地を駆け出した。カバンのあいだにはさんであるソロバンが、腰のところまで、カチャカチャ鳴つていた。吾一はカバンをおさえた。でも、ソロバンの玉はおどるのをやめなかった。

「まっすぐ行つちまおうか。」

駆けながら、彼は考えた。「京ちゃんどこへ寄ると、おくれるかもしれない。」

おかれては、たいへんである。それが気になってたまらなかったが、しかし、彼はいつものように、やっぱり、京ちゃんのところへ寄ることにした。この近所のものは、みんな京ちゃんのところへ集まって、それから、いっしょに学校へ行くことになっていた。いつ、だれがきめたというわけでもないんだが、いつのまにか、そういうことになってしまっていた。

京造はそんなに学校ができるほうではない。できる吾一が、できない京造のうちに、まい朝よることは、あんまりいい気もちではなかった。でも、ほかのものが、みんな京ちゃんところに集まるのに、どうも自分だけ、仲まはずれになるわけにはいかなかった。

京造のうちは材木の中にうずまっていた。往来に

面して、長い材木が、切り岸のようにそびえ立っている、リンバ（林場）の前のあき地には、もう六、七人、集まっていた。京造を中心にして、彼らは火をたいて、あたっていた。

「おい、行こう。きょうは遅（オソ）いんだぜ。」

自分がおくれたことはなんにも言わないで、吾一はせき立てるように、大ごえで呼びかけた。

「うん、行こう。」

京造はすぐ腰（コシ）をあげた。

彼はあごで、ぐるっと、あたりを見まわした。

「なんだ。秋ちゃんがいねえじゃねえか。」

京造は一度もちやげた腰を、また、おろしてしまつた。

「どうしたんだろう、秋ちゃん。」

「あいつ、いつも遅いねえ。」

そんなさゝやきが、あちこちから漏（モ）れた。

「おい、ぐずぐずしていると、おくれっちゃうぜ。」

吾一はみんなの注意をうながすように、いらくした語調（ゴチョウ）で言った。

「そんなこと言ったって、秋ちゃんがこなくちゃ、だめじゃねえか。」

時間のことなんか、京造はなんとも思っていないらしい。てんから平気な顔をしていた。

「おらあ、おくれるの、いやだなあ。」

ひとりがこないからと言って、自分まで遅刻（チコク）するのはたまらない、と吾一は思った。それに、けさは一時間めが修身だ。修身の時間におくれたりするのは、なお、いけない。

「じゃ、おいてつちまうのか。」

京造はほおをふくりました。

「秋ちゃんがあとからきたら、かわいそうじゃねえか。」

そう言われてしまうと、自分のほうがまちがってのような気がして、吾一は、あとのことばが出なかった。

「もう少し待とうよ。秋ちゃん、もう、じぎ、くるよ。」

京造はおつかおせるように言った。だれもこのことばに、反対するものはなかった。

たき火の上には、また、こつばがかさねられた。青いけむりがしばらく、くすぶっていたが、まもなく、パアッと燃えあがった。

「京ちゃん、もう学校じゃないの、八時ですよ。」

うちの中から、おっかさんの声がした。

「いいんだよ、まあだ。」

京造は、はね返すように答えた。彼はマルタに腰をかけて、いい気もちそうに、またをあぶっていた。店の正面の大黒バシラにかゝっている、大きなハ

シラ時計が、八つ鳴った。

たき火から離（ハナ）れたところに立っていた吾一は、

「あゝ、寒い。」

と言いながら、足ぶみするように、両方の足を二、三べんバタ／＼と動かした。じっとしていることが、彼にはどうにもならなかった。

「まあ、あたれよ。」

京造は竹のさきで、たき火の火をなおしながら言った。

しかし、吾一は火にあたるどころではなかった。

もう小使さんが一番がねを鳴らしている時分だ、と思ふと、気が気ではなかった。

「だけど、秋ちゃん、遅いな。」

吾一と同じ組みの作次が、たき火のそばで大きなあくびをした。

「迎いに行ってみようか。」

それを受けて、下級の者が、恐る／＼ことばをはさんだ。

「そうだなあ。――」

京造もさすがに腰をあげた。

「しやうがねえやつだな、あいつ。」

そばにおいてあるバケツの水を、彼はパッと、火の上におちつけた。

「じゃ、みんなして、秋ちゃんちへまわって行こう。」

彼らは、どや／＼と往来に出た。

けれども、秋太郎のうちは、学校へ行く道すじから少し横にそれていた。これからすぐ駆けて行つたつて、まに合うかどうかわからないくらいなのに、そんなほうにまわつては、当然、遅刻するにきまつている。吾一はみんなが動き出したのをしおに、